

利用者参加型設計による地域共有空間の開発プロジェクト

【プロジェクトの意義、成果及び波及効果】

多様な人が安心して過ごせる共有空間(キャンパスの共用スペース、福祉施設、屋外広場など)をつくることは、多くのSDGs目標の実現につながる。松江市では高齢化や若者の流出に加え、外国人住民・留学生も増えており、誰もが利用しやすい空間づくりがますます重要になっている。

本プロジェクトでは、実際にその空間を使う人々の声を集め、空間づくりに活かす「利用者参加型設計」という手法に取り組んでいる。外国人・非母語話者・高齢者・障がいのある方など、異なる立場の人がその空間をどう感じ、どう使っているかを調査し、誰もが使いやすい空間のあり方(ユニバーサルデザイン)を検討している。

この取り組みは、以下のように複数のSDGs目標に貢献する。

- ・3(健康・福祉)・11(住み続けられるまちづくり)：高齢者や障がいのある方が安心して過ごせる空間を実現することで、心身の健康と生活の質の向上に貢献する。
- ・4(質の高い教育)：高校生・大学生がワークショップ等を通じて地域の空間課題を学び、当事者意識を持って考える教育的な機会となる。
- ・5(ジェンダー平等)・10(人や国の不平等をなくそう)：性別・年齢・国籍・言語などにかかわらず、多様な立場の人の声を空間づくりに反映することで、誰もが公平に地域社会に参加できる環境をつくる。
- ・8(働きがいも経済成長も)・9(産業と技術革新の基盤をつくろう)：調査で得られた知見は、仮想モデルなどの技術を活用した新しい空間評価手法として、地域の公共施設整備やまちづくりに応用できる。
- ・17(パートナーシップで目標を達成しよう)：大学・地域住民・行政・地元企業など多様な主体が連携することで、プロジェクトの成果を地域全体に広げていく。

これらの取り組みを通じて、松江市の公共施設や交通環境の改善、また島根大学キャンパス内の共有空間の整備にも知見を活かしていく。

【実施体制】

(プロジェクト実施に係る共同研究者、構成員及び役割)

担当部局・職・氏名	役割
総合理工学部 建築デザイン 助教 Nguyen Tran Yen Khang	人間中心設計、都市環境、視環境
総合理工学部 知能情報デザイン 助教 Mian Riaz Ul Haque	人工知能、機械学習、自然言語処理
総合理工学部 建築デザイン 助教 三島 幸子	高齢者福祉
地域未来共創本部 准教授 丸山 実子	人文・社会・教育学